
少年と少女の高校生活

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と少女の高校生活

【Nコード】

N9434Z

【作者名】

如月

【あらすじ】

これはある少年と少女、そしてその仲間たちのお話。少年は生まれつき靈感を持ちながらも16年間普通に過ごしてきた。8月27日にある少女と会うまでは。少女と出会い、少年の人生は激変する。この物語はそんな少年とその少年の普通であった人生を変えた少女を中心とする物語です。

第一節 靈感少年

「くそっ……！こつち来るなっ！！つて足掴むなッ！！ちくしょお
おおおおお！」

夏休みも明け新学期初日の8月27日午前7時00分。

少年はただ一人、悲鳴にも近い叫び声をあげてまだ人気の少ない通
学路を爆走していた。

思い出せば、30分ほど前に『新学期だし一番に学校行ってみるか
！』などと幼稚な考えが閃いたのが全ての発端だろう。

「っていつかいつもなんで俺ばかりに寄ってくるんだああああ
ああああああ！！」

聞いていれば、『頭大丈夫ですか？』や『近くに精神科がある病院
ありますけど……』などと言われそうな発言だ。自分でもそんなこ
とは分かっている。

それでも言わずにはいられない。一応これでも少年は『会話』をし
ているつもりである。

ただ、相手の言葉が『普通の人』には聞こえないだけで。

『普通の人』からは見えず。世界から逸脱した存在。その名前ぐら
いは誰だって知っているだろう、本当に信じているかは別として。

……、それでも少年は叫ぶのをやめない。

『待つてよお……、君もこっちへ来ないかああいいいい？』

「誰が行くかッ！っっていうか喋り方が怖いわあああああああ！
！」

『待つてえ……待つてえ……一緒に行こうよおおおおお……』

「だからさっさと離れやがれええええええ……うおおっ！！？」

そしてもう一度叫んでいたとき、彼の足は走るのを突然やめた。

正確には走ることの出来る状態ではなくなったと言っべきだろうか。

その理由は簡単だ。前方1mも満たない場所に少女がいたのだから。

だが当然爆走していた足が1mも満たない距離で止まるわけが無い。
なので当たり前のように衝突した。

少年は頭を抑えながら顔を上げ、衝突したため一方的に吹っ飛んだ
少女の方へ足を動かす。

少女も頭を抑えていたが少年が来る前に既に立ち上がっていた。

「わ、悪かったな……。ちょっと追いかけてられて余裕無かったん
だ。……あ。」

普通の人から見たら、『誰もいないだろ』と言われるだろう。

真紅の色の髪をした少女の方を見ながら少年も失言だな……、と思う。

だが……いや、だからこそ少女から返ってきた言葉は少年も予想外のものだった。

「いや……、こっちも悪かった。あんなものに追いかけていたら人間なら当然逃げるだろう。」

「…………え？」

あんなもの……、少年はその言葉に疑問を覚える。

あの場には少年と少女の二人しかいなかった。それは間違いない。

だが……、それを『あんなもの』と言ったという事から分かる事実。それは

『あの存在』を見えているという事だ。

別に自分が特別などとは思っていない。ただ少年の人生でそういう人物に会うのが初めてだっただけで。

だが、少年にはもう一つ。それ以上に疑問を持たせた言葉があった。

「な、なあ…………あれ?…………どこに…………。」

その真意を聞くために少年は少女の方を見ようとするがそこには誰もいなかった。

ただ、風が吹いているだけで……。

* *

8月27日午前7時50分・私立東霞ヶ丘学院前

「まったく……何だったんだろうな、あの女……。」

私立東霞ヶ丘学院・高等部。そう書かれた門を見ながら少年は門をくぐる。

少年が通うこの学校は都内でも有名な進学校であり中高一貫校でもある。

だがこの学院で特に誇られる肩書きは二つある。一つは1713年に武士の学問所として開校されたというその歴史だろう。

決して日本最古という訳ではないが日本有数の歴史がある学校である。

そして二つ目は。

「で、凜ちゃんは新学期早々何で仏頂面なんだ？」

少年は周りに不穏な気配が無いかと再確認するといつの間にか右側に茶髪で少し制服を着崩している少年がやってきた。

少しばーっとしていたためか特に相手の少年の言葉を考えずに返事を返そうと少年はする。

「ん？ああ………？……、待てい！！」で『じゃねえよッ！誰が凜ちゃんだッ！』

やがて何かおかしいことに気づいた少年はとび蹴りを食らわせるかのごとく足を振り上げ、相手の少年へ向かって振りぬく。

うおッ！？と相手の少年も新学期早々保健室に行く気など更々無いためかがんでかわす。

「何すんだよー……。危なく新学期早々保健室に行くところだったぞ。」

「うるさいわッ！そもそも何回ちゃん付けするなと言ったら分かるんだよお前は。」

「お前の名前が海崎凜かいさきじりんっていうのが悪い。偏見かもしれんが初めてクラス名簿見たときは女と思ってたし。まあ『鈴』よりはいくらか男っぽいかもしれんが……。」

「功哉こうさいなんか日本中の『凜』という名前の男に殴られてしまえばいいのに。」

ブツブツと呪いのように凜は呟く。そして慣れてしまいそんな自分が怖い。

そして功哉と呼ばれた少年はいつも通りとどめの言葉をさす。

「ついでに言うと女顔だっというのが拍車をかけてると俺は思うんだ。」

「それを言つなあああああああああああああああー!」

決して名簿は名前だけだったわけではなかった。顔写真も載っていたのだ。

それなのにクラスで男だろと思ったのは三分の一だけだと分かったときには真面目に二階から飛び降りようと思ったらしい。

「そして本題だが……。」

「さつさと言えやツ! 今までの会話でどれだけ字数を使ってると思っただつ!」

「とりあえず落ち着けよ……。で、今日も『霊』たちに襲われてたのか?」

「『霊』、なあ……。いつもあれのお陰で遅刻寸前だよ……。」

『あの存在』 〃 『霊』。誰もがその名称を知っているだろう。

それは? 人で非ず、世界から逸脱した存在? と考えるのが普通だ。

凜はあくまで普通の人間だ。『霊媒師』や『陰陽師』といった人間でもない。どこにでもいる普通の人間だ。ただ、世間一般で言う『イメージネーション靈感』があるだけで。

「そんなの俺には見えないけどな。今もお前の周りにいるのか？」

「あー……今はいないな。でもどういうわけか知らないが俺はこの学校で『霊』を見た事はほとんどないぞ？」

「偶然じゃないのか？」

「さあーな。でも家とかだつて普通にいるし、こんなに数が少ないのは学校ぐらいだな。」

「ふーん……。とはいえ？この学校？だったらそれこそ霊媒師とかいても信じられるだろ。」

「まあ、な。つていうかお前は『特科』なんだし霊媒師とか見た事無いのか？」

「ないなあ……。霊媒師は見たことないよ。だけど生徒会長がアレだろ？いてもおかしくないとは思ってしまつのは当然だろ。」

『特科』。それがこの東霞ヶ丘学院の二つ目に誇られる肩書きだ。

正式名称は『特別生徒育成支援科』。この学校の四分の一の生徒がこれにあたる。

どこの学校にも存在する普通科に対する『特科』。そこに入学する条件はただ一つ。

『他の誰よりも優れた？何か？を持つ生徒』、だ。つまり一芸に秀でていれればいい。

サッカーでも武道でも何でもいい。あるならば、『異能の力』でも。『特科』は特にクラスを分けるわけではないが午後からの科目が普通科の生徒と異なる。

「生徒会長か……。アレは化け物だからなあ……。というか生徒会全体が化け物の集まりって噂があるからな……。」

この学院の生徒会長は必ず『特科・主席』から選出される。

つまり？何か？に秀でている生徒たちの頂点に立つ人物ということになる。

生徒会役員はその頂点に位置する生徒会長が選ぶ事になっている。

だからこそ生徒会役員は『魔術師』やら『妖術使い』などの噂も多い。

そもそも生徒会役員の別称がアレ過ぎるのだから……。

「っていつかそろそろチャイム鳴るしクラス入るぞー。」

「入るぞー、って目の前にもう入り口が見えてるけどな……。」

こうして凜と功哉は自分のクラス、1年D組と書かれた表示を見て入っていった。

既にクラスの中には30人ほど入っていて多分凜たちは最後の方だろう。朝に一番初めに学校行ってみるか、などと言ってたのは誰なんだか、と凜は呟きながら席へ向かう。

「あ、りんりん 遅刻ギリギリだね。いつも通り」

「誰がりんりんだっ！っていうか今日これで似たセリフ言ったの二回目だぞ!？」

「私はまだ今日始めてだもーん」

「確かにそうだな、遙。だがお前は毎日記憶を消してるわけじゃあるまい……！そもそもお前は暗記力が物凄いから『特科』に入ってるのに何で毎日言っても理解しないんだよ!？」

「暗記力と音楽センス、だよー。そして理解はしてるに決まってるじゃん」

黒目黒髪と典型的な日本人の容姿の少女、大和遥やまとはるかは苗字やその可憐さから一部のファンからのあだ名は『大和撫子』だったりする少女である。

凜とは中学校時代からの仲でこのやり取り自体は先ほどの功哉よりも古い。既に日課だったりする。

「ったく……。何で俺の周りにいる奴はこんなのはっかりなんだ……。」

「むう……。その言い方は酷いなー。凜が見えるアレに比べたらずっとマシだと思うよー？そう思わない、功哉?」

「遙の言うとおりだ。これでもアレに比べたら幾分マシな存在だと自負してるんだけどなあ……。」

「それは比べる存在が間違っていると思うんだけど！？っていうか俺の周りにいる奴は霊かよ！！」

その質問に対して功哉と遙は一度顔を合わせて凜の方へと向ける。

もちろん言うことはただ一つ。

『何を今更……？』

「声を揃えていいやがったよこいつら……。」

あははは、と二人は笑いながら『だって事実だし』とまたも揃えて言った。

そして功哉はふと思ったように話題を変える。

「でもお前のその『イマジネーション靈感』が認められればお前だって『特科』入りだろ？もう一度申請してみればどうだ？」

「無理無理。判断するのは霊が見えない教師たちだからな。そもそもそんな能力を持った奴が入っても対応に困るだろ。伸びようがある力じゃないんだし。」

そう凜が言ったとき、ガラガラと扉が開く音が耳に入った。

やばい、先生だ。と三人は気づき恐るべき速度で優等生のように姿勢正しく座った。元々三人とも席が近くだったから決して立ち歩いていたわけではない。

「海崎、碧泉、大和。そんな無駄なことをしても監視カメラで筒抜けだから意味無いぞ。」

……、そう。担任の言うとおりこの学校は異様に監視カメラが多い。一つの教室に二つの監視カメラは流石に予算の無駄な気がするのだが理事会の命令らしいのでどうにもならないらしい。

「まあ、そんな事はどうでもいいとして……、」
いや、良くはねーだろ、と言いたくなつた凜であるが自分の評価を自分で下げってしまうのもどうかと思うのであえて口を閉ざした。

「えっと……、転校生が今日からやって来ることになった。特科の生徒だ……、入ってくれ。」

担任がそう指示すると先ほど閉められた扉はもう一度開き始めた。

そして、転校生が入ってきた。真紅の髪の少女。凜と朝ぶつかった少女だ。

先生から自己紹介を、と言われた少女はそのまま真ん中へ来て一度礼をして言葉を述べ始める。

「今日から、皆さんと同じクラスで勉強することになった天野美冬あまのみふゆです。よろしくお願いします。」

一切表情を変えずに少女は担任から指示されたとおりの席へと向かう。

もし、この後人生を振り返る事があるならば人生が大きく変わった瞬間はこのときだったのかもしれない。

そんな考えが凜の頭の隅に浮かんだが、その後始まった授業によって消えていった。

第一節 靈感少年（後書き）

駄文ですいません……。

更新スピードは出来る限り頑張るので温かい目をお願いします。

ではまた次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9434z/>

少年と少女の高校生活

2011年12月29日15時49分発行